

# 企業の決算書の作成過程と分析のポイント

ここでは、営業活動を複式簿記で仕訳する仕組みや決算書の作成過程、経営分析のポイントを解説します。

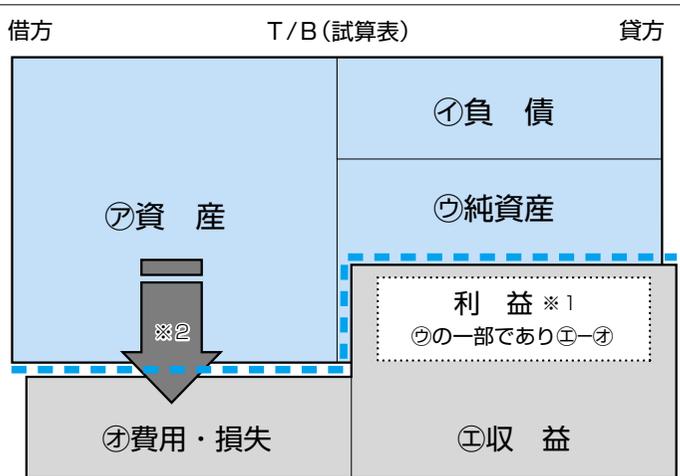
公認会計士 経営革新等認定支援機関 村井直志

図表1 近代商店の営業活動と仕訳

- 現金100万円を出資し、近代商店を設立した。
- レジスターを、現金5万円で購入した。
- 商品60万円を仕入れた。うち40万円は現金で支払い、残額20万円は後払いのツケとした。
- 先に仕入れた60万円の商品のうち、50万円分を80万円で売った。そのうち、40万円は現金を受け取り、残りは売掛金40万円で掛売とした。
- 電話代1万円を現金で支払った。
- 従業員に、本月分給料5万円を現金で支払った。
- 電気代1万円を現金で支払った。
- 決算整理仕訳（売上原価の算出）

	借方科目	金額	貸方科目	金額
①	現金	100万円	資本金	100万円
②	消耗品費	5万円	現金	5万円
③	仕入	60万円	現金	40万円
			買掛金	20万円
④	現金	40万円	売上	80万円
	売掛金	40万円		
⑤	通信費	1万円	現金	1万円
⑥	給料	5万円	現金	5万円
⑦	水道光熱費	1万円	現金	1万円
⑧	棚卸資産	10万円	仕入	10万円

図表2 財務諸表の基本的な仕組み（5つの箱）



■の箱がB/S：資産－負債＝純資産  
 ■の箱がP/L：収益－費用・損失＝利益  
 ※1 利益を通じて上下の箱がつながる  
 ※2 資産は費用・損失となる。⑦から④にある「決算書の1本線」を越えるのは簡単  
 ・固定資産は時の経過で減価償却費（費用）  
 ・売掛金は回収不能になれば貸倒損失  
 ・現金は不正会計で横領されれば雑損失

出典：『Excelによる不正発見法 CAATで粉飾・横領はこう見抜く』村井直志（中央経済社）

（貸方）現金5万円  
 （借方）消耗品費5万円  
 「レジスター」というと、一般的には形ある「資産」と考えがちです。ところが、会計や税務のルールでは「金額的重要性」という基本的な考え方があり、僅少なもので「資産」として考えずに「費用」とすることが認められているのです。これは、「決算書の一本

の線」を理解していれば分かることです。  
 ここでいう「決算書の一本の線」とは、図表2のとおり、上半分の3つの箱「貸借対照表」と下半分の2つの箱「損益計算表」の境界線（破線）のことです。図表2を見れば分かるように、「資産」は「費用」「損失」に、「負債」は「収益」になり、その逆も

ありうるわけです。  
 しかも、ライブドア事件のように「連結会計」という仕組みを使えば、資本である「純資産」を売上高のような「収益」に見せかけて粉飾（利益が上がっているように装うこと）もできるといいうように、この「決算書の一本の線」の存在を知ることが、会計を制する極意の1つでもあります。

「運転資金」という資金需要の発生を読み取る  
 ③商品60万円を仕入れた。うち40万円は現金で支払い、残額20万円は後払いのツケとした  
 （貸方）現金40万円  
 買掛金20万円  
 （借方）仕入60万円  
 商品の仕入れには、仕入代金の

## 1 複式簿記の基本と決算書の作成過程・仕組みを理解しよう

企業の営業活動、つまり「取引」を帳簿に記録する技術を「簿記」といい、この取引を借り貸し・左右の複式で記録することを「複式簿記で仕訳する」といいます。また簿記では、左側を借方、右側を貸方という「リ」「し」の跳ねの向きが左右を表します。  
 仕訳する際の取引は、「資産」「負債」「純資産（資本）」「収益」「費用」の5つに分かれます。この各取引内容の増減を左右に分けて記載し、5つの区分のうち、貸借対照表には資産・負債・純資産が、損益計算書には収益・費用が記載されることとなります。  
 ここでは「近代商店」の営業活動の仕訳（図表1）を通じ、決算書の代表である、損益計算書と貸借対照表が作られるまでの過程を解説します。

金融機関の担当者は、決算書の仕組みを知ること、多くの知見を得られるはずですが、最低限の知識レベルとして、日商簿記検定3級レベルの商業簿記は必須。担当する融資先がメーカーであれば2級レベルの工業簿記の知識も不可欠です。  
 ここでは、商業簿記の基本を整理します。なお、会計や取引の本質を理解してもらいたいため、消費税や源泉所得税のような論点は割愛します。  
**資産は費用や損失に負債は収益になりうる**  
 ①現金100万円を出資し、近代商店を設立した  
 （貸方）資本金100万円  
 （借方）現金100万円  
 商売の「元手＝出資」は、株式

会社であれば「資本金」勘定に計上します。ちなみに、事例のような当初の「出資」と区別して、出資後に「資本金」を増やすことを「増資」、減らすことを「減資」といいます。  
 ここでよくある間違いが「資本金が100万円あるから、現金も100万円ある」というものです。確かに、資本金を「出資」した時点では現金100万円がありますが、「資本金」という勘定科目はあくまで「出資」当時の目印に過ぎません。  
 会社が大きくなったり、小さくなったりする過程で、現金は増えたり減ったりするものです。「資本金100万円」であつても、取引活動を通じて現金の増減があるので、必ずしも資本金に見合うだけの現金があるわけではないという点には留意してください。  
 事例でも、期末時点の「資金100万円」に対して「現金88万円」となっています（図表4）。  
 ②レジスターを、現金5万円で購入した